

35. 日本の履物変遷

群馬大学芸 石元 明

1. 履物は服飾の一部として、風俗装身上重要なものである。しかし我国では古来足を卑しみひいては、これを取扱う職業までをいやしいものとみなした風習があった。文献的資料、故実的方面からのものは多いが一つの学問として、研究されているものは案外すくないので掘り下げてみたいと思う。今回は履物の一部分の鼻緒について取りあげてみたい。

2. (一)履物の概論, (二)形態, (三)材料, (1)元禄以前の鼻緒, (2)元禄を中心とした鼻緒, 婦人間に愛好された細緒は西鶴の著などに数多く見られる。(四)禁令, (五)明治以降の鼻緒, 鼻緒を列举すれば, すり緒, つぶねぢ, 二つね

ち、生かけ、くりかけ等がみられる。

3. 履物は最初は足先に突掛ける形式の緒であったが、履物が足に密着せず歩行に困難であることから前緒をつけたように思われる。元禄前の鼻緒は主として植物性にして原始的な感じをあたえて、元禄中心としたものは、絢爛そのものであったが、禁令によって進化方向は中止された。企業家庇護制度のあったことは、今日の中小企業、農業政策と一脈通ずるところがあるように思われる。